28年目の1.17

関西大学　社会安全研究センター　小澤　守

1995年に勃発した阪神・淡路大震災（兵庫県南部地震）から28年が経過した．かたや南海トラフ地震が心配されるなか，街行く人たちにどの程度の切迫感があるのだろうか．少なくとも28歳以下のものにとって阪神・淡路大震災の直接的な経験はない．家族が同震災で亡くなった方々にとってはいつまで記憶から消え去ることはないのだろうが，それでも時の経過とともに希薄になっていく．先ごろ震災を風化させないことおよび若い人たちに少しでも震災のみならず安全ついて考えてほしいとの趣旨に賛同した中高一貫校の生徒たちの活動に付き合った．いろいろな体験を話しても，携帯電話などまるで市中になかった28年前とはまるで環境が異なる現在を生きる生徒たちにどの程度の実感を持ってもらえるか，難しい問題である．

一般に過去の記憶は時と共に徐々に希薄になり，場合によっては経験を語ると何かしら美化してしまうような気がする．筆者自身も同様であろう．中高生と議論していて過去に書いた文章を思い出した．当時筆者はある学会の編集委員として原子力安全研究を中心とした特集号を担当していた．話はそこから始まる．

「さて，そろそろ執筆をお願いした方々から原稿が届く頃と思っていた矢先の1月17日未明，突如，すさまじい轟音と強烈な振動でたたき起こされた．暗闇の中で家族の安否を確かめ合い，体の上に載っている箱などを取り除き，手探りでペンライトを見つけ出した．家族には着替えるように指示するとともに，家の中の状況を見て大変なことが起こったことを理解した．台所は食器の破片だらけで，金魚の水が辺りに飛び散っていた．各部屋には確かに倒れているものもあるにはあるが，この程度ならすぐに回復できるなと，意外に冷静だったことを思い出す．

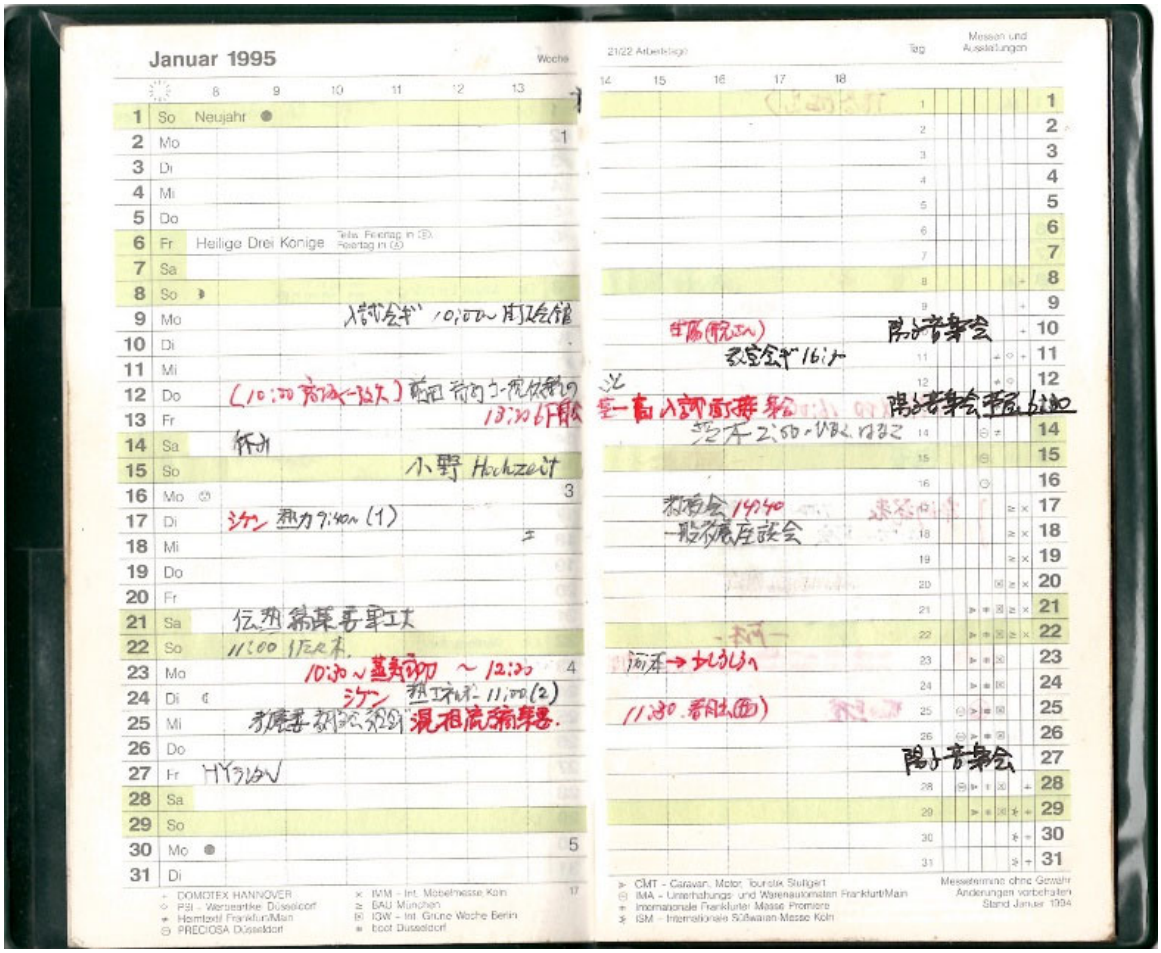
ところが，夜明けとともに目にしたものは瓦礫の山とあちこちから上がる真っ黒な煙，時折見える凄まじい火炎であった．我が家から見える瓦礫の前で「おばあちゃん！」と叫ぶ声．外には我がマンションから出てきた人々の不安げな顔．すぐにはマンションが倒壊するとは思えなかったので，家族には室内に留まり，もし大きく揺れたらすぐに飛び出せと指示して，安否確認のため自転車で公衆電話を探しに神戸市内に飛び出した．走り回って目にしたものはすさまじい光景ばかりであった．筆者は昭和25年の生まれであるが，戦災もかくありなんと思われた．停電のためヘリコプターからの映像を見るすべもなかった筆者には，長田区と兵庫区がすべての判断基準であった．あのとき驚くほど冷静だったのはなぜだろう．

震災後はや40日が過ぎようとしている．当初あれほどすさまじかったテレビや新聞，ラジオの報道にも，またバスを待つ行列にも，街で見かける人々の暮らしの中にも徐々に平静を取り戻しつつある．あちこちで水道が回復し，ガスが使えるようになり，電車が通じ，復旧の名のもとにともかく生活が確保され，街のあちこちに活気が戻ってきたようにも見える．

全てのものが日常化していく中で，震災当日，猛烈な火炎の前でなすすべもな

く立ち尽くす人々，極度の恐怖からか「燃えろ，もっと燃えろ，燃やしてしまえ！」と叫ぶ老人，それを後ろから「やめて，おじいちゃんやめて」と抱きかかえる娘の姿が日に日に鮮明になってくる．毎朝の炊き出しの喧騒の傍らにそっと手向けられた小さな花束を前にして語る言葉を失ってしまう．ただただ自然の力のすさまじさを思い知るのみである.」

先日，家族を伴って筆者が18年余り過ごした神戸市灘区の石屋川近辺を尋ねてみた．話には聞いていたがかくもすさまじいとは．学生時代を通じて13年を過ごしたかつての下宿や近くの家庭教師先など，思い出のすべてが瓦礫と化しているのを見て，涙を抑えることができなかった．かつての大学紛争の最中に友人たちと議論を繰返し，酒を酌み交わしたあの思い出がどこかへ飛んで行ってしまったような気がした．見るべきでないものを見てしまったような気がした.」

あれから28年，細部については記憶のかなたにあるが，ここにしたためた情景はいまだに目に焼き付いている．幸運にも生き延びたあの震災のありさまをどうやって経験していない中高生に伝えたらいいのか，残念ながら筆者には適切な答えを持ち合わせていない．上に書いたものは「伝熱研究」Vol.34, No.133 (1995), p.105に「編集委員会だより」として書いた拙文*の一部に若干の手直しをしたものである．写真は筆者の手帳．果たせなかった用件の数々．

* http://www.wattandedison.com/HTSJ133.pdf